

第12課「霊の結ぶ実は真理」

* 「真理」とは何だろう？できるだけ単純な言葉にしてみようと考えた結果「本物」という言葉に行き着いた。そして真の「本物」はイエス・キリストに他ならない。イエスが示して下さった全てに「本物」を感じ取ることができる。「本物」は確かに手に入れる事、身につける事は難しい。しかし、イミテーションで我慢する事は、本当の満足感を得られないように、「本物」であるイエスを受け入れられず他のもので満足しようとしても、私たちは真実の平安と、純粋な満足は得られないだろう。

1. 「真理」とは何か？

- **客観的真理**：事実、真実、原則など、私たちが正しく生きてゆくために必要な知識（学んで得る事柄）。聖書を通して原則を知り、その事実（真実）を学び知る事は「真理」を探求するために必要な第一歩。
- **主観的真理**：客観的真理は、あくまでも机上の知識ではないだろうか。私たちは学び知った知識を、知恵を持って営むことにより、更に深い確信に導かれる。真理は、主観的に体験すること（真理によって生き方の方向が示され、生き方が変えられてゆく）によって得られる。
- **真理の源**：「真理」とは何か？を一言で説明するとしたら、それは「イエス・キリスト」であると言うことができる（ヨハネ14：6）。イエスを学び（客観的）、イエスに従う事（主観的）で、私たちは多くの真理に出会うことができる。罪からの救いの道、天国への道、永遠の命と幸福への道は、神を知る事である。真に知る事は、全身全霊をもって知るという事であり、そこには深い体験によって見いだされる事も含まれる。イエスは人性をとられ（受肉）、地上の生涯と十字架の贖いによって、私たちが神に導かれるための、神の命にあずかる道（方法）を開いて下さった。私たちは門であるイエスを見いだし、私たちのために開かれている門から入り、道を歩いてゆく（マタイ6：13～14、ヨハネ10：7）。

2. 「真理」への導き

- **聖霊の働き**：人は自らの知恵や力で「真理」を悟ることはできないので、神は「真理」へ導くための助け手を与えて下さっている（ヨハネ16：7～15）。聖霊は、イエスの全て（客観的側面と主観的側面）を明らかにされる。聖霊の働きは私たちにとって大きな力である。しかし、聖霊は大きな働きをして下さっているにも関わらず、さりげなく、謙遜である。真に私たちが神の真理を得られるように、多くの場合あからさまに教えるのではなく（自己主張されない）、気づかせ、思い出させ、興味を引き出し、積極的に思い行なう事を促し、あたかも私自身のアイデアであるかのようにして、自分のものとして確立させて下さる。そこには、謙遜の模範のみでなく、イエスに人を導くというご自身の役割を完全にはたされる。私たちは、罪によって汚れた心になってしまった心が砕かれ、悔い改めてイエスに献身する必要がある（聖書研究ガイド83p「希望への光」の引用を参照）。聖霊の働きは、そんな私たちの心を砕き、耕し、信仰の種が成長する土壌を整え、イエスという真理に向かったの成長を促している（マタイ13：18～23）。
- **誠実に従う**：「心を尽くしてわたしを求めよ」（エレミヤ29：13）とは、神に誠実に従う事である。誠実に神と向き合う気持ちは「真理」を悟るための必要条件である。歴代誌下25：2には南ユダ王国第9代の王アマツヤの事が示されている。彼は誠実な行いではなく、義務的に正しい行いをしたとされる。これは神をだまし裏切る事になる（人に対しても）。こうした行いは一時的であり、やがてその本性が現される。私たちは真心から誠実である事が期待されている。これもまた神のご介入と導きが不可欠である。

3. キリストへの道を辿る

- **私たちの良心の現実**：私たちの心には、罪という烙印（焼き印）が押されている。それは私たちの良心にも大きな影響を与えている（1テモテ4：2）。その影響を最も顕著に示すのが「偽善」である。私たちは良心と理性によって善悪のバランスをとっている。しかし、それを保つのは容易な事ではない。私たちの心は悪の傾向を持っているので、神の導きがなければ罪深さへと沈んでしまう。私たちは神を信じていると言いながら、行いでは御心にかなわない事を行ってしまう弱さがある。そのまま対処しないとどうになってしまうのか。私たちの心は次第に悪に慣れてしまい、悪しき事に対して良心が麻痺してしまう。例えば何か悪い事をする。はじめは良心の呵責を強く感じる。しかし、悪を度重ねるうちに良心の呵責は薄れてゆき、やがて悪を行なう事が当然のようになってしまう（場合によっては悪を楽しむ）。罪依存症になってしまう。手遅れにならないうちに対処したい。その対処法は、聖書を通してイエスを知り（客観的真理）、イエスの模範に従う（主観的真理）事である（ヘブライ5：14、ヨハネ7：16～17）。
- **真理に歩む**：「真理」に歩むとはキリストへの道を辿る事である。わたしの思いと行ないは一致しているだろうか？残念な事に悪い思いと行ないは調和を取りやすいものである。反対に善い思いと行ないは困難である。実のところ私たちは善い思いと行ないの調和を求めているのだが、多くの人々はそれが困難であるが故に「理想と現実」という言葉に逃避してしまう（1ヨハネ1：6）。これで良いのか！良いはずない。だからこそ神の介入を求める必要がある。最も悲しむべき事は、善い思いに対する悪い行いではないだろうか。多くのキリスト者がその問題の狭間にあって悩んでいると思う（ローマ7：13～24）。実際の生活の中で真理（イエス）の模範（愛）がどう実践されているだろうか。救われるために愛する（偽善）のではなく、愛するが故に、愛されるが故に救われる事実を信仰によって確かめてゆきたい。